



書評・新刊紹介

山岸高旺 著

淡水藻類 淡水産藻類属総覧

温泉, 雪山, 湿原, 湖沼等, 陸水の環境は多様であり, これらの自然は我々を誘い, それぞれの環境には様々な淡水藻類が生育している。また, 淡水の生育地における四季を通じての環境変化は大きく, 淡水藻類の無性・有性生殖の生活環はダイナミックに変化する。これら淡水藻類は系統的にみれば多岐にわたり, 1個の目以上の分類群を専門的に研究するのに一生の時間をかけても研究し尽くせないほどの分類学的な課題が残されている。従って, 私事になるが, 日本藻類学会にお世話になって30年もの時間が経過したが, 淡水藻類全般を熟知する余裕がないまま白髪頭となってしまった。しかし, 山岸高旺先生は60余年の永きに亘る淡水藻類研究の経験からほとんどすべての淡水産の藻類を熟知しており, その集大成としての大著が2007年11月に出版された。これが「淡水藻類 淡水産藻類属総覧」である。淡水産藻類のほとんどすべての属を網羅しており, それぞれの属の形態・生殖等の基本的情報と原記載を含めた重要な文献が掲載されている。

淡水産藻類の分類は国際植物命名規約に従い, その多くが標本として保存することが技術的に困難である微細藻類であるため, 新種のタイプが図だけでも良いことになっている。従って, 18世紀のリンネの時代を出発とする図と記載だけの文献が重要な資料であり, これらがある程度整理されていないと分類学を研究する上で支障となってくる。そのような点で「淡水産藻類総覧」は淡水藻類の研究をする21世紀の研究者にとっては非常に有用で便利な資料といえよう。一方, 生物の多様性はDNA塩基配列の遺伝情報で把握できるように思えるかもしれない。しかし, 生物そのものの本質的属性は形態を主とする表現形質であるので, いくら遺伝情報を用いて系統関係が明らかになろうと表現形質の情報が蓄積されないと生物そのものは理解しえない。従って, 淡水産藻類のほとんどの属の基本的な形態と生殖等の表現形質が記載されている本書は淡水産藻類研究のバイブルとして後世まで受け継がれていくことは確実である。

私は緑藻類のボルボックス目 (= クラミドモナス目) の記載分類学の研究を行っているが, 現在, 米国の国立バイオテクノロジー情報センター (NCBI) 等の遺伝子データバンクに登録されている本目の属は約40であるが, 本書によると120もの属があげられ, 未だ近代的な手法で研究されていないもののがかなり残されていることがわかる。このような文献資料は, 我々がフィールドで「未だ会ったことのない恋人」を探すモチベーションとなる。「未だ見ぬ *Stephanoon*, *Spondylomorom*, *Polyblepharides* よ出てこい」と思い研究を続けることは, 結局「ツチノコ, カップ, 雪男」を追い求めることと変わらない



内田老鶴圃,
B5判上製,
総頁1444頁,
2007年1月,
定価52,500円
(税込), ISBN
978-4-7536-
4085-0

いかも知れない。これも微細な淡水産藻類研究の面白いところであり, 本書は「謎の未確認淡水産藻類 (Unidentified Mysterious Freshwater Algae [UMFA])」を属レベルで徹底的に掲載した図鑑であるとも言える。最近では environmental sample からの塩基配列情報に基づいた UMFA が多く公表されているが, 幻の淡水産藻類はやはり「形態的イメージ」を基に追い求めたいものである。

これまでに淡水産藻類全般を扱ったものとして, Smith (1950) “Freshwater Algae of United States” や Wehr & Sheath (2003) “Freshwater Algae of North America” 等があるが, ほとんどが一部の地域の淡水藻類だけを対象としており, 本書のように全世界のものを対象とし各属の詳細が図とともに一冊の本としてまとめられているものは今までにない。このような点で本書は藻類を扱う世界中の研究者待望の書でもある。植物全属のリストと原記載論文を網羅したものに Index Nominum Genericum (Plantarum) (Farr *et al.* 1979) があるが, 分類階級で整理されておらず, 各属の特徴が全く示されていない。私事になるが, 単細胞ボルボックス目の *Haematococcus* 属が分子系統で2個に分かれ, タイプ種を含まない方の属名に関しては近縁の群体性の *Stephanosphaera* を用いるか新属にするかしかないと考えていた。しかし, 本書を見た結果, *Haematococcus* のタイプ種と分子系統で分離する種を基に設立した *Balticola* 属があるのに気がつき自らの浅学を改めて自覚するに至った。

本書をいち早く購入でき, 利用できるのも著者と同じ「日本人」であることによるものものである。本書の国際的な重要性から必然的に後から英訳 (または他の言語訳) されるものと思われる「外国語版」が出版されるまでの東の間, 我々は「日本語が読める特権」を享受できる。

(東京大学・理・生物科学 野崎久義)